

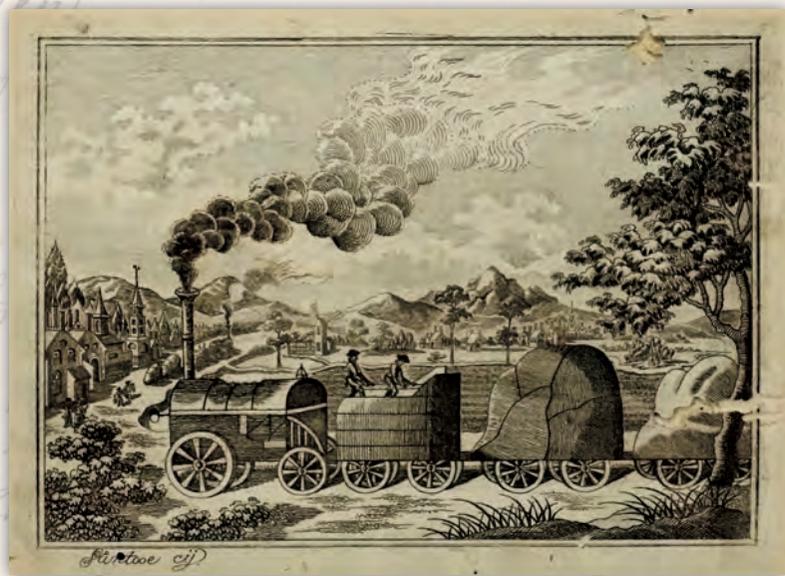
神田外語大学 国際日本文化研究センター 京都府京都学・歴彩館 共催
企画展「明石博高 ー京都近代化の先駆者ー」

会期：2022年4月16日(土)～6月5日(日)
会場：京都学・歴彩館 | 階展示室

京都の古書肆 伏見春和堂主人 故若林正治氏旧蔵

若林コレクションの里帰り

— 神田佐野文庫貴重資料 —



神田外語大学附属図書館



言葉は世界をつなぐ平和の礎
神田外語大学



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国際日本文化研究センター
International Research Center for Japanese Studies

京都府立 京都学・歴彩館
Kyoto Institute, Library and Archives

はじめに

神田外語大学日本研究所客員教授 松田 清

企画展「明石博高一京都近代化の先駆者」の特色

この企画展は明治初年、京都に舎密局（理化学実験所）と療病院（西洋式病院）を創設し、京都近代化の先駆者となった青年医師・官僚明石博高（ひろあきら、1839～1910）に焦点をあてた初めての展示会です。また、明石の業績を、その歴史的背景である京都の洋学の歴史にさかのぼって考察するというユニークな視点から構成されています。

こうした新規かつ特色ある展示は、日本医療文化史資料の宝庫である宗田文庫（日文研所蔵）と京都の古書肆伏見春和堂主人・故若林正治氏の洋学史資料コレクション（神田外語大学附属図書館所蔵、以下若林コレクションと略称）、明石博高文書（歴彩館所蔵）、山本読書室資料（歴彩館寄託資料）を結びつけることで可能になりました。

若林コレクションの成立と経緯

とりわけ、若林コレクションは、若林正治氏（1912～1984）が古典籍収集家として手がけた多方面のコレクションの中で、晩年まで手放さず愛蔵したものでした。幕末から続く春和堂書店の子に生まれた正治氏は1933年、旧制第三高等学校2年生のとき、洋学史資料収集を開始しました。この年、化学実験をサボって、京都の産科医・蔵書家佐伯理一郎の蔵書売立に参加。お目当ての山脇東洋『蔵志』（1759）を取り逃がし、「此の時程私は自分の無学と資金のないことを残念に思ったことはなかった」と言います。

以来、戦争を挟んで、およそ半世紀にわたって形成された洋学史資料コレクションの大半を購入したのが、佐野学園神田外語グループ会長・愛書家の故佐野隆治氏（1934～2017）でした。この若林コレクションは1987年の神田外語大学開学に際し、学校法人佐野学園から神田外語大学附属図書館に移管されました。こうした成り立ちと経緯のため、若林コレクションは京都の洋学資料をも豊富に所蔵しながら、これまで生まれ故郷に帰る機会がありませんでした。今回の企画展のために精選した貴重資料36点は、40年ぶりの里帰りとなります。

神田佐野文庫

神田外語大学附属図書館では、若林正治氏と佐野隆治氏に相通じる古典籍への愛情を継承するために、大学創立30周年を期に、若林コレクションおよび既収の日欧関係洋書コレクションをもとに神田佐野文庫を発足させ、洋学関連貴重資料の収集を続けてきました。その中から今回の企画展のために、ドドネウス『草木誌』ライデン版（1608）、将軍家侍医桂川国寧（甫賢）筆『依ト加得（ヒポクラテス）文章一』（1838）の写本と『ジャワ植物図譜』（1818頃）の3点を選びました。

『ジャワ植物図譜』は、京都蘭学の開拓者辻蘭室筆の蘭文とその和訳、および江戸の蘭学者宇田川榕菴筆の彩色図からなる合作写本です。原画はスペイン人植物学者F. ノローニャの手になります。1818年頃に京都木屋町あたりで作られたと推定される大変貴重な写本です。

表紙 29『銅版新鐫極細書画便覧』（1859）所載「汽車図」（岡田春燈斎刻）

4『ジャワ植物図譜』（1818頃）所載ラスサマルラ図蘭文解説（辻蘭室筆跡）より

若林コレクションの里帰り

— 神田佐野文庫貴重資料 —

1 出品資料

各タイトルの先頭につけた番号は展示資料番号です。若林コレクションの資料には（若林蒐書）、その他の神田佐野文庫資料には（神田佐野文庫）のラベルを付けました。



1 二条木屋町地図(部分)三町組作成 文政元年(1818)
(若林蒐書)

京都の自治組織を町組(ちょうぐみ)という。この地図は下京に8つあった町組のひとつ、三町組が作成したもの。高瀬川の北端、鴨川からの取水口に面した「一ノ舟入」の北に「角倉」(角倉邸)、南に「長州屋舗」(長州藩邸)、「加州屋舗」(加賀藩邸)が並ぶ。明治初年、京都府はこの地域に殖産興業のための諸施設を集中的に建設した。長州藩邸は勧業場・舎密局(明治4)、旧角倉邸は織工場と呼ばれた織物技術伝習所(明治7年)、旧加賀藩邸は殖産興業政策を大胆に推進した榎村正直京都府大参事(明治2年就任)の邸宅となり、南西隅に製靴場(明治6年)が建てられた。



4 ジャワ植物図譜 辻蘭室筆蘭文及び和訳 宇田川榕菴筆彩色図 F. ノローニヤ原画 文政元年(1818)6月頃
(神田佐野文庫)

京都の地下官人で幕末に本草家も輩出した渡邊家に伝来した。スペイン人植物学者フランシスコ・ノローニヤ(1748~1787)がジャワ島西部調査中(1786)に描いた植物図105図、鳥図4図、由来不明の植物図25図からなる。ノローニヤ自筆原画はパリ自然史博物館蔵。他にロンドン自然史博物館写本、ベルリン州立図書館写本がある。本図譜の底本は18世紀末に京都にもたらされたらしい。そのルーツは長崎渡来写本と推定され、配列、内容ともロンドン写本に酷似する。

左図: キップパイート Cippayit (着生植物)

右図: カンダスウリイ Candasoelie (シヨウガ科の植物)



4bis(参) ジャワ植物図譜 複製本 (神田佐野文庫)

Manaktjeon マナクチラン図

蘭文名とカナ書きは辻蘭室筆。図は宇田川榕菴摸写。キュウカンチョウ(九官鳥、学名 *Gracula religiosa*)を描く。本図はパリ自然史博物館所蔵ノローニヤ自筆「ジャワ動物誌」(Francisco Noroña, *Zoologie de Java*, c. 1786.) 掲載図(無名)と近似する。辻蘭室は公家久我(こが)家に仕えた京都の蘭学者。宇田川榕菴は江戸の蘭学者。植物画にも優れた。



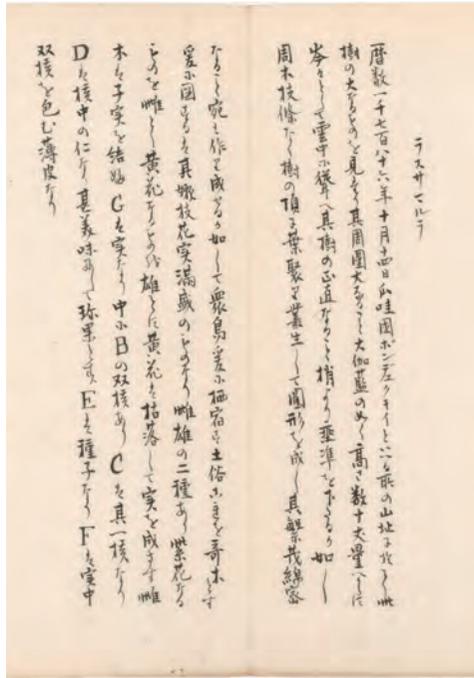
Manak Doedot マナクドドット図

蘭文名とカナ書きは辻蘭室筆。図は宇田川榕菴摸写。鳥の和名、学名とも不明。本図は在欧3写本(パリ写本、ベルリン写本、ロンドン写本)にみられない。



4a(参) ラスサマルラ図 (複製)

「ラスサマルラ Rassa malla」は学名 *Altingia excelsa* Noronha、和名ラサマラノキまたはラサマラソゴウコウ。ヒマラヤ、中国南部、インドシナ半島、マレーシア、インドネシアに分布するフウ科 *Altingiaceae* の常緑高木。属名 *Altingia* はノローニャがオランダ東インド総督 W.A. アルティング (Willem Arnold Alting, 1724 ~ 1800) に敬意を表して付けたもの。

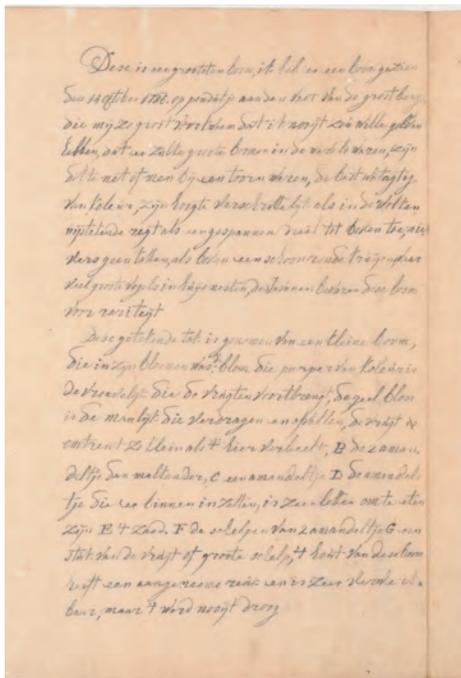


4b(参) ラスサマルラ蘭文解説 辻蘭室訳 (複製)

辻蘭室はほとんど独学でオランダ語を学び、オランダ語文法を研究した。蘭文解説の冒頭を直訳すれば、「これは巨木である。その1本を1786年10月14日ポンデュキユ (Pondukje) の高山の麓で見かけた。目の前に現れた大きさといったら、この世にこれほど大きい木があろうとは信じられないほどだった。その太さはまるで塔の側にいるようだった」。



ジャワ植物図譜を包む紙や紙帳の書き判「五升庵」。五升庵は俳人蝶夢 (1732-96) の号として知られる。



4c(参) ラスサマルラ蘭文解説 (複製)

『ジャワ植物図譜』の植物図17図には辻蘭室の筆跡でオランダ語の解説文と和訳がある。これらの解説文は内容的にパリ写本、ロンドン写本、ベルリン写本に見られない独自のもので、ノローニャのラテン語またはスペイン語の解説文を蘭訳したものと推定される。蘭訳者は不明。



5 四海句双紙初編 玉蕉菴(白川芝山)編 文化13年(1816)刊 (若林寛書)

商館長ドーフは、文化3年(1806)、7年(1810)、11年(1814)の3回江戸参府を行い、途中、京都に滞在した。1817年帰国まで在日9年に及び、日本語に通じた。「Inadsma no Kajna wo karan Koesa Makoera. イナツマノカヒナヲカラクサマクラ」(稲妻の腕を借らん草枕)は、祇園二軒茶屋の名物、豆腐切りを見て詠んだ俳句。

9a(参) 医門須知和蘭語法解 藤林淳道(普山)著 幕府天文台記官 馬場佐十郎(貞由、1787~1822)のオランダ語序文(文化12年) (若林菟書)

阿蘭陀通詞出身の馬場佐十郎はこの序文で、著者藤林普山を自分の師である長崎の蘭学者中野柳圃(志筑忠雄、1760~1806)の門流に位置づけ、その業績を称賛する。志筑忠雄はオランダの天文地理書を研究翻訳するとともに、セウエル『オランダ語文法』などの原書にもとづき中野柳圃の名で日本最初の西洋文法書を著した。

Voorreede

Hoe noodzaakelijk het is, dat de Geene, die de hollandsche boeken leeren willen, in deeze spraakkunde ervaren zijn, is gemakkelijk te begrijpen; door deeze ervarenheid is men niet alleen in staat, om de geschreeven werken, Namentlijk van de genees en heilkunde, met nut en voordeel te leezen, maar men verkrijgt daar door ook de bekwaamheid om de zieken behoorlijk te behandelen, ja ook om de overzetting in onz moeder taal, zonder fouten, te doen. in veele overzettels die nu in het ligt gebragt zijn, vind men wel misslagen, het welk zijn gesprooten alleen uit de onervarendheid in deeze spraakkunde, waardoor als men, met het leezen van zulke boeken de vrugten daar uit te plukken, en met de desselfs overzettinge het voordeel voor den anderen te zaaijen wil, is het best, dat men ten eersten deeze taalkunde leert.

Voor omtrent 100 jaaren waaren verboden dat de Japanders de hollandsche letteren te schrijven, en had men de hollandsche talen bij mondeling geleert, dus was het onmogelijk te bevorderen, maar na het permissie van dezelve te leeren, van tijd tot tijd was merkkelijk bevorderd, en dewijl 'er nogtans geen regt regel en wijs van spraaken genoeg bekend was, heeft men wel abuijs zo in het schrijven als in het vertaalen gedaan, maar zedert de ontdekking van de opregt smaak van de spraakkunst, door onzen wijdberoemde meester N. liuhu in het Jaar boenkwa Eerste, gedaan, zijn de duister' wolken, die hier en daar overhingen, geheel verdweenen, gevolglijk moet men hem altoos in Eerbied blijven; hij is zeer zwak van gesteltenis geweest, maar door zijn leerzuchtigheid van aart heeft hij altoos den neus op de boeken gehouden, en Eindelijk zodanig groot dienst voor ons gedaan, maar tot ons ongeluk is hij drie jaaren daarna, in het vierde jaar boenkwa, op 47 jaaren oud, in Nangazakij, gestorven.

de Nakomelingen van den heer liuhu zijn maar drie in het Eerste, namelijk J. Rokziro, N. kitsemon en de ondergetekende, waar van de Eerste is nu ook in Nangazakij, de tweede is reets dood, en de derde word daar na aan 't hof Jedo ontboden; door deeze laatste heeft de gemelde Liuhoanse leerregel eerst aan de leergenoote te Jedo medegedeelt, waar onder Woedagawa en Foezii zijn de voornaamste, die dezelve eerst wel bevatten hebben.

de docter F. Taijskij in Miaco woonende is een van de nakomelingen van onzen leerregel, en is zeer leerzuchtig van aart, hij vlijt en naarstigd met de overzettinge van de spraakkunst, uijt het zelfde oogmerk dat ik hier boven gesproken heb, en ter drukpers gebragt, gelijk men hier nader zal ontwaaren; wat dit werk aangaat mag men zeggen dat een fakkel ligt voor de leerlingen is, den vijf en twintigste van fatiguats in het Jaar boenkwa Twaalfde, is geschreeven

Door
BBa: Sajuro
te Jedo

9b(参) 医門須知和蘭語法解 オランダ語序文和訳

序

およそ阿蘭陀語の書を読まんと欲する者、その文法に通ずる如何に欠く可からざるか、人のよく解する所なり。この実地の知識を以て始めて、書物、即ち内外科の書を有益かつ有利に読解し得るのみならず、また此れに依り、能く病者を正しく療し、無論、我が母語に翻訳する誤り無からしむ。当今出版する所の数多の訳篇は実に誤謬に満てり。一にこの文法を知らざるに因る者なり。然るが故に、上記の医書を読み、その果実を摘取し、また、その翻訳を以て他者にその益を播種せんと欲すれば、最善は、第一に文法を学習するにあり。

約百年以前、邦人は阿蘭陀文字を以て書くを禁ぜられたり。而して口頭にて阿蘭陀語を学びたり。故に進歩する能わざりき。然れどもその学習を許されしより、時に及んで著しき進歩あり。一方、言語の正則並びに正用法を知る未だ十分ならざれば、作文にも翻訳にも誤用しばしば生ぜり。しかるに、文化元年、我等が名高き師、中野柳圃は、文法の醍醐味を発見せり。爾來、ここかしこを覆える暗雲は消え去りぬ。是を以て人すべからく不断に彼を尊敬すべし。彼甚だ蒲柳なりき。然れども好学の素質ありき。而して鼻端を書物中に入るを常とせり。しかも遂には、我等に実に大なる恩恵を及ぼせり。嗚呼、我等の不幸なるかな。その三年後、文化四年、四十七歳にして、長崎に没せり。

柳圃氏の門流中、主要なる者は三人あるのみ。即ち、吉雄六次郎(権之助)、西吉右衛門、並びに下記署名の者なり。第一の者は今、同じく長崎にあり。第二の者は既に亡し。第三の者はその後、江府に召されき。上に記せる柳圃の学理は、この最後の者初めて江戸の同学の士に伝うる所となれり。就中、宇田川(玄真)、藤井(方亭)はその主要なる者にして、最初にこれをよく習得せり。

都に住する藤林泰助は我等が門流の一人なり。実に好学の素質に富む。而して上述したると同じき見地より、勤勉努力、以て文法書を翻訳せり。そは以下爰に見る所の如し。この著は譬うれば、学生の松明なりと言うべし。

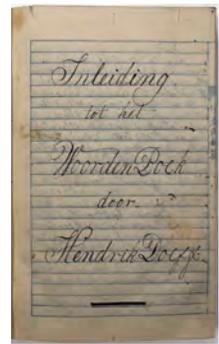
文化十二年八月二十五日誌す
於江戸

馬場佐十郎



10 蘭和辞書 零本 伝藤林淳道(普山)筆 筆写年不詳 1冊 (若林寛書)

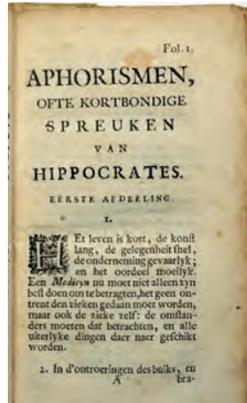
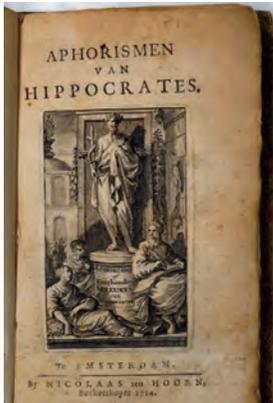
稲村三伯(海上随鳴)が寛政8年(1796)に江戸で完成させた蘭和辞書『波留麻和解』を、藤林普山が同年、普賢寺村から京都に出て医学修行中に筆写したもののか。版心に「藤林蔵」とある。



第1冊
ドゥーフ蘭文自序

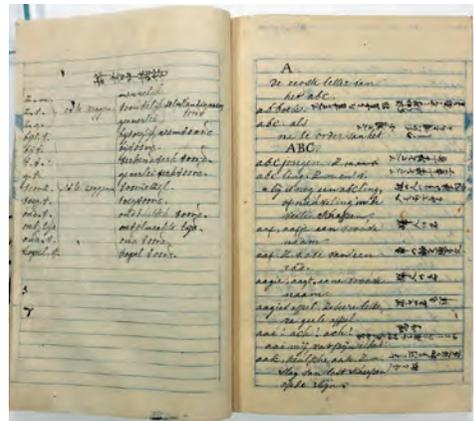
11 ドゥーフ・ハルマ ヘンドリックドゥーフ・中山作三郎・吉雄権之助 ほか編 文政11年(1828)12月 宇多玄微写 9冊(若林寛書)

蘭和辞典「ドゥーフ・ハルマ」は、商館長ドゥーフが幕命により、ハルマ『蘭仏辞典』をもとに阿蘭陀通詞吉雄権之助らの協力を得て編訳。1817年のドゥーフ帰国までにはほぼ草稿が揃った。その後、阿蘭陀通詞中山作三郎が主幹となり校訂。天保4年12月(1834年正月)に完成した。この写本は完成以前に流布した写本のひとつで、通詞による増補過程をよく示している。江戸の宇田川玄真塾(風雲堂)で塾生の宇多玄微(のち陸奥二本松藩医)が筆写したものの。ドゥーフのオランダ語序文、その訳文および掛通詞の凡例が揃う貴重な写本である。



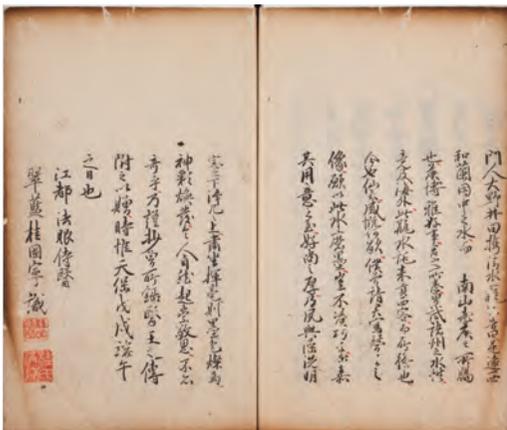
13 『ヒポクラテス箴言集』 ステファヌス・プランカールト蘭訳 第2版 アムステルダム 1714年刊 (神田佐野文庫)

第1箴言のオランダ語を直訳すれば、「命は短く、医術は長く、好機は早く、経験は危うく、診断は難しい。医師が患者について為されるべきことを最善を尽くして実践するだけでなく、患者自身も介助者もそれを実践すべきである。そして外的事物すべてがそれに向けて整えられねばならない」。



11b ドゥーフ・ハルマ 第1冊

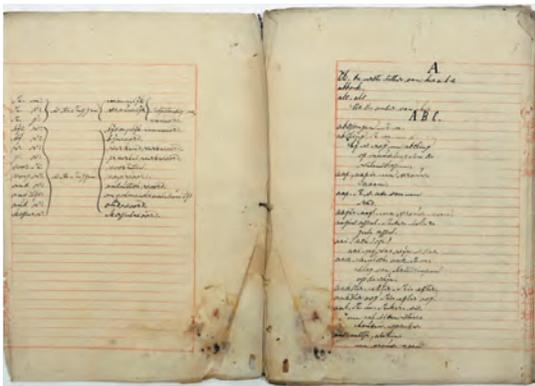
A項目に先立つ「辞書中諸符」は見出し語の品詞、男性・女性・中性などの略号を説明する。日本最初の英和辞典、堀達之助編『英和对訳袖珍辞書』(洋書調所、1862刊)は「ドゥーフ・ハルマ」の和文の縦書き方を踏襲し、訳語も英蘭辞典を介して「ドゥーフ・ハルマ」に多くを負っている。



15 依ト加得(ヒポクラテス)文章一 桂川国寧(甫賢)筆 天保9年(1838)5月成 筆写本

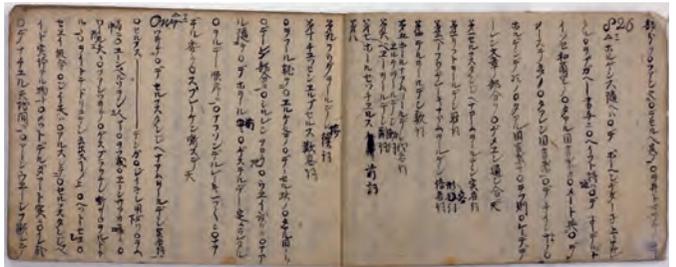
(神田佐野文庫)

桂川甫賢が門人二人に描き与えたヒポクラテス肖像画の漢文賛と甫賢の添え状の写し。門人は薩摩藩主島津重豪(1833年没、89歳)が生前、参府したオランダ人から入手したオランダ国の水を持参して所望したので、甫賢はその水で墨を擦り描いたという。漢文賛、「人身の性」たる自然治癒力は「人身中の一大良医なり」(原漢文)は大槻玄沢訳ヒポクラテス伝による。



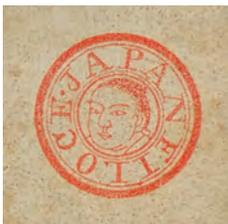
16 道普法兒馬断簡 広瀬元恭筆写か 安政4年(1857)頃 (若林寛書)

版心に「道普法兒馬 天然堂」とある。広瀬元恭(1821~1870)は甲斐出身の蘭学者。原典主義により江戸最高の蘭学教育を行っていた坪井信道の日習堂に学び、京都で蘭学塾時習堂を開いた。門人に佐野常民、陸奥宗光がいる。



22 聞訳私録 近江湖西 河合氏写 弘化3年(1846)(若林寛書)

幕末各地の蘭学塾でよく使用されたオランダ語文法書『ガラマチカ』(Grammatica of Nederduitsche spraakkunst. 第2版、1822)の第2章品詞論のオランダ語原文の読みをカナ書きにし、所々に訳語を書き入れた写本。「近江湖西 河合氏」は未詳。



17 広瀬元恭蔵版印 「FILOCE・JAPAN」 似顔絵入り(若林寛書)

16の「道普法兒馬断簡」とともに伝わる。この似顔絵入り朱文円印(直径35mm)は広瀬元恭の時習堂蔵版印に用いられた。20の「理学提要」扉参照。似顔絵入り欧文印は珍しい。



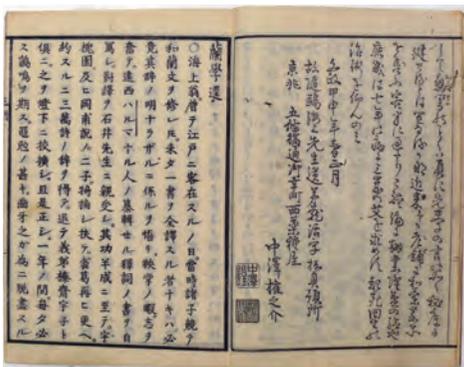
21 理学入門 J.N.イス フォルディング原著 安政4年(1857)5月翻刻 福島信夫古作蔵梓 (若林寛書)

イスフォルディング著『医学生のための理学入門』蘭訳(1826)の序論、「大気」(空気)論、「水」論を抜粋した和刻本。整版。見返し扉の蔵版印は「陸奥福島信夫古作蔵梓之記」。「白松氏」(不明)旧蔵。



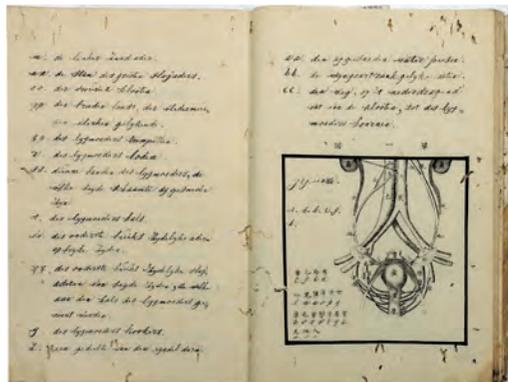
23 Grammatica of Nederduitsche spraakkunst. オランダ語文法和刻本 安政5年(1858)頃刊 (若林寛書)

ペリー来航後に巻き起こった蘭学ブームの需要に応えるため、オランダ語文法書『ガラマチカ』(1822)を鉛活字で翻刻したもの。「午八月黒田先生所賜 村治俊吉蔵」の墨書がある。「午八月」は安政5年8月、「黒田先生」は膳所藩蘭学者黒田麴廬(行次郎)。「山田氏書画室記」印、「高田氏聚珍」印あり。「山田氏」は不明。「高田氏」は近江八幡出身の国学者高田義甫(よしとし)(1846~1893)か。



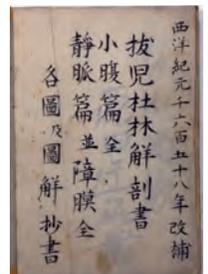
26 蘭学逡 藤林淳道(普山)著 序文 文政7年(1824)刊 (若林寛書)

「故随鳴海上先生遺弟蔵活字板具預所 京兆 五条橋通御幸町西薬種屋」(序文より)の中沢権之助が藤林普山編『訳鍵』100部を再版した際、「訳鍵」の『凡例附録』(文化七年刊)を「蘭学逡(らんがくちかみち)」と改題して再版したものの。



24 抜兒杜林解剖書 バルトリン原著 子宮図 文久3年(1863)原田迂斎写 (若林寛書)

トマス・バルトリン著『改訂人体解剖書』蘭訳(1658)の抄写本。前半は「第1編下腹部について」、後半は「静脈と静脈弁の実体について」。遊紙表に「琶湖南瀨 原田迂斎蔵」の墨書がある。「迂斎」は膳所藩蘭学者黒田麴廬の門人、原田善太郎(後、平田好)の号と思われる。バルトリン解剖書は『解体新書』(1774)翻訳にも参照された。





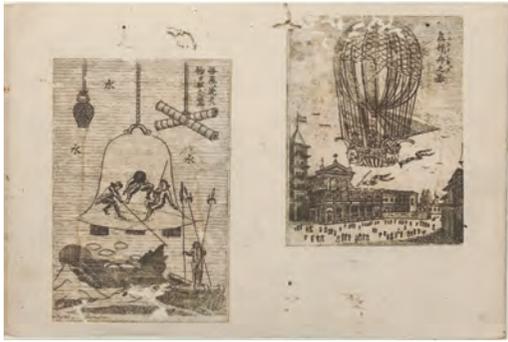
27 和蘭文字早読伝授 田宮仲宣著 天保10年(1839)刊折本 (若林菟書)

手習いに用いられた折帖の仮名手本にならって、「いろは」のアルファベット表記を、ローマン書体大文字立体、同小文字立体、など7書体で表示している。これらの書体は藤林普山『訳鍵』の『凡例附録』に依拠したと思われる。編者の田宮仲宣（廬橋庵、1815年没）は京都に生まれ大坂で活躍した戯作者。泥間似合紙（どろまにあいがみ）による再版。



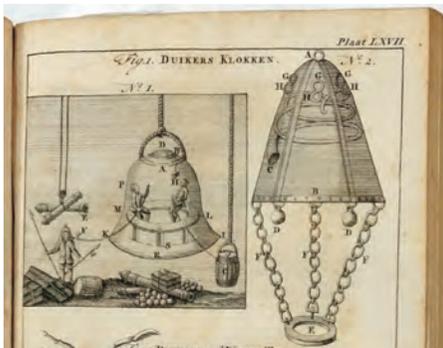
28 微塵銅版画集 初代玄々堂松本保居刻 四条川原夕涼 嘉永2年(1849)正月調之 三野氏 (若林菟書)

微塵銅版風景図 24 枚を貼り込んだ折帖。京都の銅版師、初代玄々堂松本保居（儀平）のローマ字銘「iasqokj」はオランダ語式表記 iasoeokj（ヤソオキ）の誤り。「三野氏」は不明。



29c 銅版新鑄極細書画便覧 松田緑山鉄筆 安政6年(1859)海底ニ沈タル物ヲ取上ル器 (若林菟書)

上冊 (24 折、全 50 図)「海底ニ沈タル物ヲ取上ル器」(縦 82mm、横 55mm) は水中工事を行うための潜水鐘 (diving bell) の図。典拠はエフベルト・ボイス編訳『新修学芸百科事典』オランダ語版、第 3 冊第 67 図版の「ドイケルス・クロッケン」(Duikers Klokken) 図である。「飛行舟 (リュクトシキップ) 之図」は 1783 年 12 月 1 日、パリのチュイルリー宮で有人飛行した水素ガス気球「シャルリエール」の図。



30 エフベルト・ボイス編訳『新修学芸百科事典』オランダ語版 アムステルダム 1769~78年刊 10冊 ドイケルス・クロッケン(潜水鐘)図他 (若林菟書)

蘭学者に重用されたアルファベット順・小項目主義の百科事典。原典は英語百科 A New Complete Dictionary of Arts and Sciences. London, Second Edition. W. Owen, 1763-1764. 本書は文久 2 年 (1862) の幕府遣欧使節将來品。最初の所蔵者の蔵書印が切り取られ、「京都出張兵部省印」「大阪医学会」「石橋栄達蔵書」印がある。石橋栄達は旧制第三高等学校教授。



29 銅版新鑄極細書画便覧 松田緑山鉄筆 安政6年(1859) 汽車図 岡田春燈齋刻 (若林菟書)

松田緑山は玄々堂二代目、松田儀十郎 (1837 ~ 1903)。下冊 (24 折、全 55 図) の汽車図 (縦 81mm、横 113mm) は典拠不明であるが、「Suntooe cij」(シュントウサイ) のオランダ語式ローマ字署名から、緑山の門人、岡田春燈齋 (義房、通称儀七郎) 作と分かる。



33 掌中洋学童子訓 松岡文橘著 春 燈齋英流鑄 明治4年(1871)4月序 小川柳影軒編刊 折本(若林菟書)

銅版。折本。著者の松岡文橘は、本草学者松岡恕庵の子孫松岡周輔 (明治 7 年、下京十二・十三・十四区の医務取締役、洋医) の子。のち明石博高の門人となり、明治 14 年 (1881) に退官した明石を支援した。跋文を寄せた樵雲逸史は文橘本人か、未詳。銅版師春燈齋英流は岡田春燈齋の門人らしい。



31 洋学須知 公荘徳郷・窪田耕夫編 安政6年(1859)若山茂助 他刊 (若林菟書)

オランダ語文法辞典。序文を寄せた赤沢寛堂(明治7年没)は坪井信道の門人で日習堂塾頭。佐久間象山にオランダ語を教えた。鳩居堂の熊谷直恭が嘉永2年(1849)に創設した種痘所、有信堂で活躍。のち京都療病院取締をつとめた。



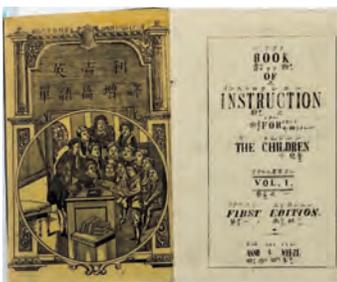
32 洋算手引草 明治4年(1871)4月 山本伊三郎銅鑄 自然堂蔵版 (若林菟書)

銅版。折本。寺子屋で教えられていた和算に代わって、新時代の洋算、すなわち「俗に筆算といふて筆にてかきて、よせ引かけわり自在なる法」(本書前書き)を学ぶ入門書。



34 和英通語 松岡章編 明治5年(1872)4月刊 好問堂 (若林菟書)

木版。各葉の上段を分類語彙集、下段を句語・短文・会話集とする英和対訳の入門書。編者松岡章は松岡文橘か。



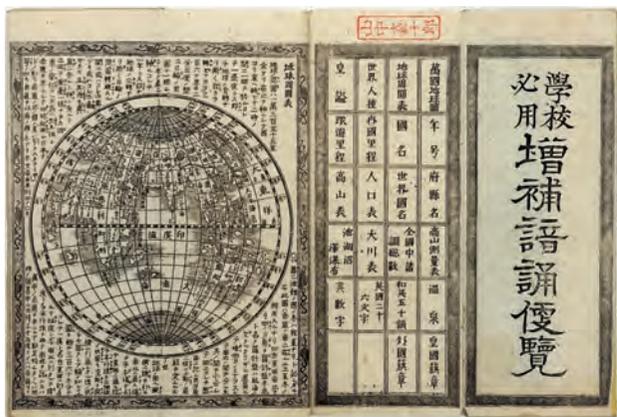
35 英吉利単語篇増訳 松岡子保訳 明治6年(1873)春 小川金助他刊 橋本澄月調刻 銅版 (若林菟書)

開成所版『英吉利単語篇』(慶応2年、活版)の見出し語1490語の訳語を増訂して銅版としたもの。見返し(銅版絵入り扉)に「明治六年春校正 西暦千八百七十三年/英吉利/単語篇増訳/橋本澄月鑄」とある。橋本澄月は、37「学校専用掌中増補諸語便覧大成」(銅版)の彫刻者でもある。訳者松岡子保は未詳。



36 新曆明解 黒田行元(麴廬)著述 明治6年(1873)2月刊 (若林菟書)

黒田麴廬(行元は諱、通称行次郎)は文久2年(1862)5月、膳所藩蘭学師範から幕府洋書調所に出仕したが、廃藩後は困窮し、蘭学知識を生かして啓蒙書の翻訳刊行で生計を立てようとした。本書はそのひとつ。明治政府が太陽曆を採用し明治5年12月3日をもって明治6年1月1日とした直後の混乱期に出版された。



37 学校専用掌中増補諸語便覧大成 下京第六区 学校蔵版 明治6年(1873)10月刊 折本 銅版 (若林菟書)

橋本澄月鉄筆。次の22の部立てからなる。「万国地球図」「地球周円表」「世界人種」「皇諱」「年号」「国名」「外国里程」「環海里程」「府県名」「世界国名」「人口表」「高山表」「高山測量表」「全国中諸調総数」「大川表」「池湖沼沢瀑布」「温泉」「和英五十韻」「英国二十六文字」「英数字」「皇国旗章」「外国旗章」



38 独逸語階梯 原口隆造編 明治17年(1884)石版 春和堂(若林茂一郎)刊 (若林菟書)

石版刷り。本文はゴシック筆記体を用い、訳語を付けない。編者原口隆造(1852~1901)は京都府立の外国語学校「欧学舎」(明治4年3月設立)でドイツ人教師ルドルフ・レーマン(1842~1914)にドイツ語を学び、明治5年京都療病院出仕。明治12年に、療病院併設の京都医学予科校のドイツ語教師、明治17年には、創立された私立独逸語学校の教授となった。レーマンはのちに東京高等中学ドイツ語教師となった。



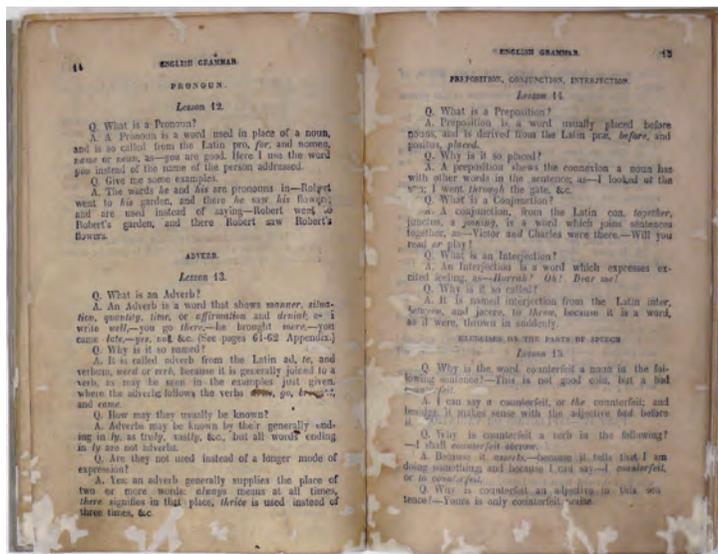
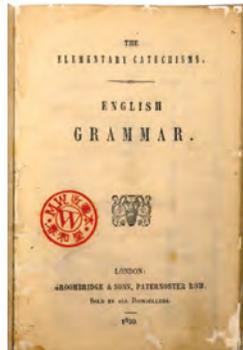
39 独逸小文典 原口隆造編 明治18年 (1885) 春和堂(若林茂一郎)刊 (若林寛書)

欧文標題紙と本文はドイツ語のみからなり、原則としてゴシック字体で印刷。



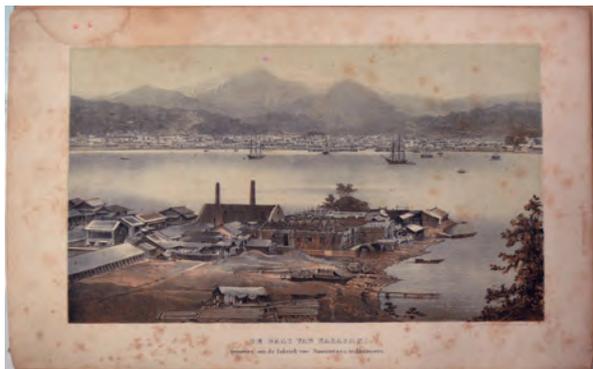
40 改正増補独逸文典略訳解 原口隆造編輯 田中廉二訳述 明治22年(1889)春和堂(若林政吉)刊 (若林寛書)

『改正増補独逸文典略』(Leitfaden zur deutschen Grammatik für Anfänger von R. Haraguchi. Durchgesehen von Herrn R. Lehmann.) (春和堂蔵版 明治22年9月27日、若林政吉発行、若林茂一郎発売)の全訳。活版。本文にドイツ語文はなく、和訳のみ。



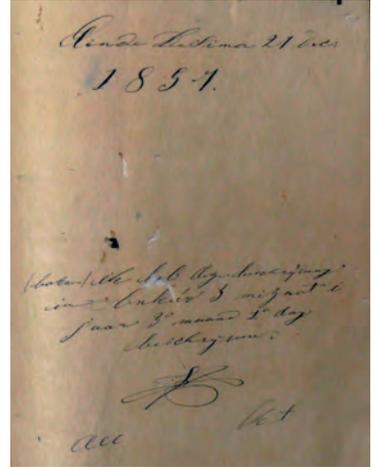
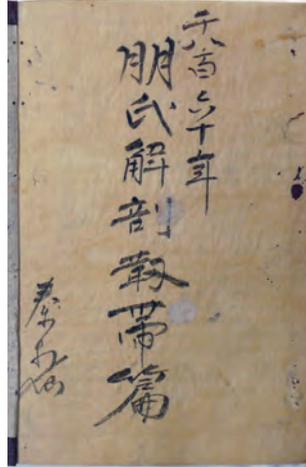
40bis 木の葉文典English Grammar 文久元年(1861)頃 蕃書調所刊 (若林寛書)

鉛活字版。The elementary catechisms. English grammar. London, Groombridge & Sons, 1850. の複製。伏見の春和堂主人若林正治はこの天下の稀覯本を昭和14年(1939)3月19日に入手。挿入付箋の墨書「木の葉文典 丙戌三月秋艸道人題 (印:會) (印:朔)」は、歌人・美術史家の会津八一が昭和33年(1958)3月、伏見の蔵元「月の桂」の当主増田徳兵衛邸で、若林に乞われて書いたもの。



42c ポンベ『日本滞在見聞記(1857~63)』ライデン 1867~68年刊 第1冊 口絵(多色石版) 飽浦(あくのうら) 蒸気船修理工場(製鉄所) 1861年5月4日竣工 (若林寛書)

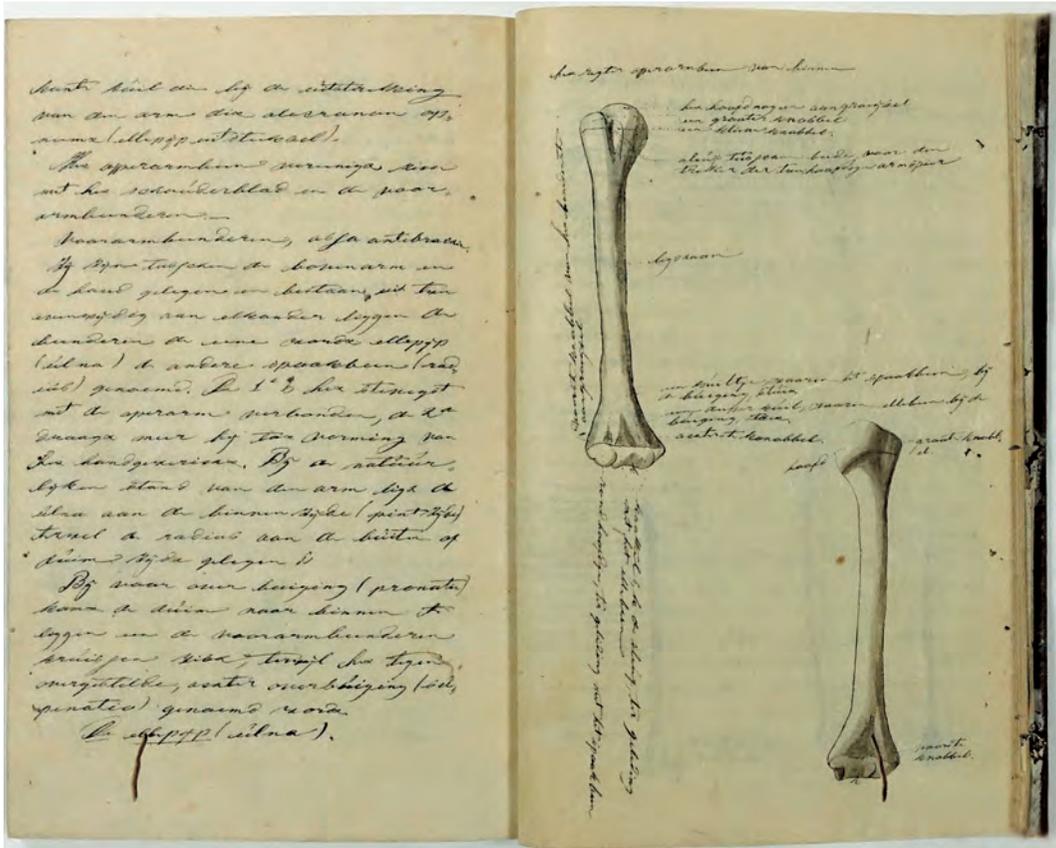
本書はサブタイトルに「日本帝国とその国民を知るための貢献」とあるように、教養あるオランダ人読者のための日本紹介書として執筆された。口絵はオランダの協力により長崎の飽浦に完成した蒸気船修理工場(日本では製鉄所と呼ばれた)。



千八百六十年
朋氏解剖韋帶篇
秦朴仙

Einde Desima 27 dec:
1857
(bokan) ik heb deze beschrijving
in bnkuw 3 miznot i
jaar 3^o maand 1^o dag
beschryven [sic]

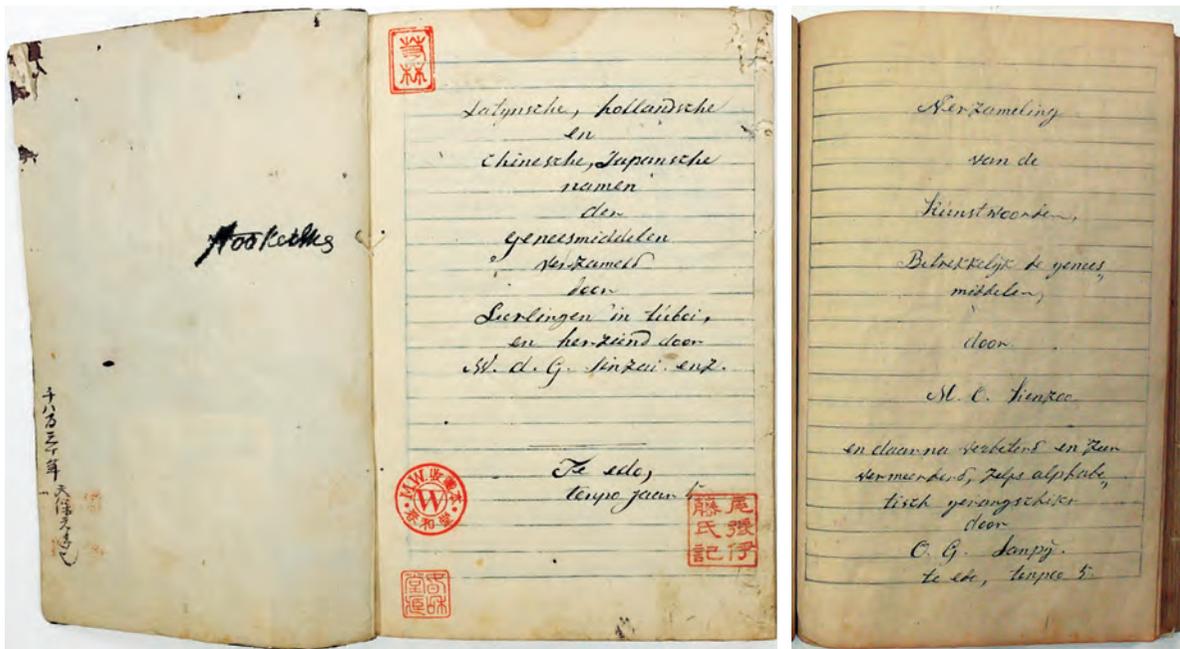
(和訳) 1857年12月27日出島にて擱筆
文久三癸亥三月朔日写之 朴庵



46 朋氏解体書 越前勝山藩医学生 秦朴仙筆 仁義礼智信5冊 文久3年(1863)3月1日 佐倉順天堂にて写了 ポンペ (若林蒐書)

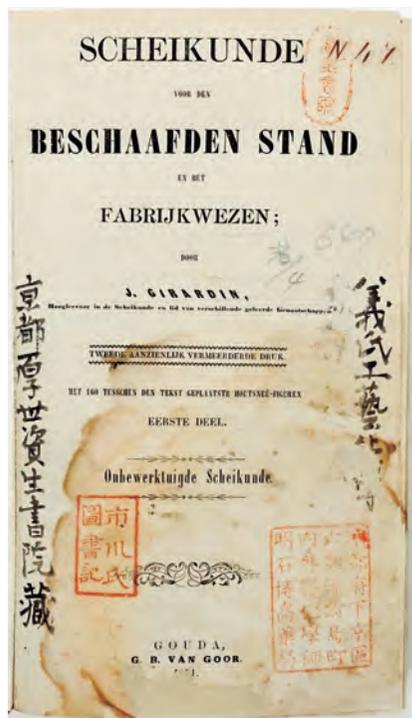
越前勝山藩校成器堂(1843年創立)の初代学頭秦魯斎の三男、秦朴仙(朴三郎、慶応2年8月没)が留学先の佐倉順天堂塾で書写。塾主佐藤尚中(たかなか)は義兄の幕医松本良順の勧めで文久元年(1861)から翌年にかけてボンペに学び、大量のボンペ蘭文講義録を持ち帰った。

題簽に儒教の五常(仁義礼智信)を記した5冊のオランダ語写本は当時の漢蘭折衷のスローガン「東洋道徳・西洋芸術」(佐久間象山)を髣髴とさせる。ボンペがこの解剖学講義録作成のために参照したのは、カール・エルンスト・ボック『生理学及び外科解剖学からみた解剖学提要』の蘭訳(1840~41)だった。



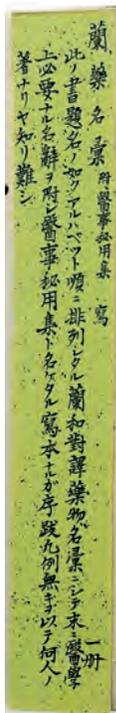
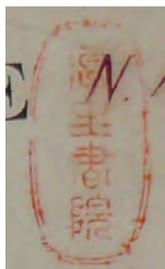
48 薬名アベセ引 坪井信道塾生編 宇田川榛斎校閲 天保5年(1834) 伊藤圭介旧蔵 (若林寛書)

本写本は2部に分かれ、前半「薬名アベセ引」(題簽)の蘭文タイトルは「羅蘭漢和薬名集 坪井塾生編、宇田川榛斎等校閲 江戸にて 天保五年」の意。後半の「コンストウオールド」(題簽)の蘭文タイトルは「医薬関係術語集 三尾謙造編・緒方三平(洪庵)改訂第増補 アルファベット配列 江戸 天保五年」の意。本書は緒方洪庵の師であり原書講読を重視した坪井信道塾の学風を伝える。



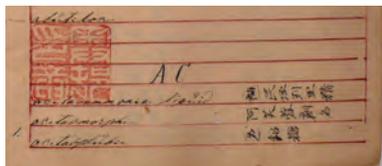
62 ギラルジン「教養人・工場のための化学」第1巻 無機化学 ハウダ 1851年刊 明石博高手沢本 (若林寛書)

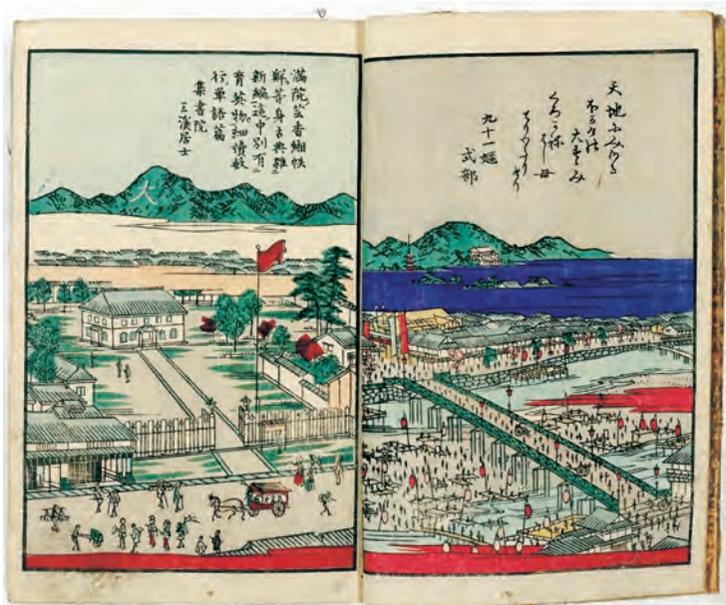
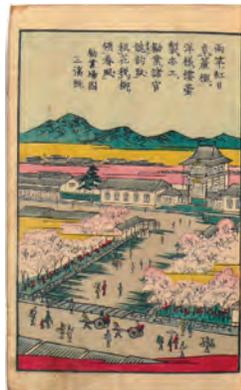
幕末に普及した蘭訳化学入門書のひとつ。明石博高の訳稿「義氏工芸指要密書」は伝わらない。原著はフランス、ルーアンの化学教師ジャン・ジラルダンによる労働者対象日曜学校の講義録。標題紙に「厚生書院」「市川氏図書記」「京都府下京区/六組備前島町/内外医化学師/明石博高薬局」の各朱印および「義氏工芸化学」「京都厚世資生書院蔵」の墨書、「N.47」のペン書きがある。



49 蘭薬名彙 付医事秘用集 書写年不明 奥村裕齋旧蔵 解題 杉浦三郎兵衛筆 (若林寛書)

本書前半の「薬名」(内題)は48「薬名アベセ引」の、また後半の「医事秘用集」は48後半「コンストウオールド」の、それぞれ増補写本にあたる。緒方洪庵の適塾で学んだ丹後田辺の奥邑裕齋の旧蔵書。題簽および緑色挿入紙の端正な文字は蔵書家・蘭学資料収集家であった杉浦三郎兵衛(丘園、1876~1956)の手になる。





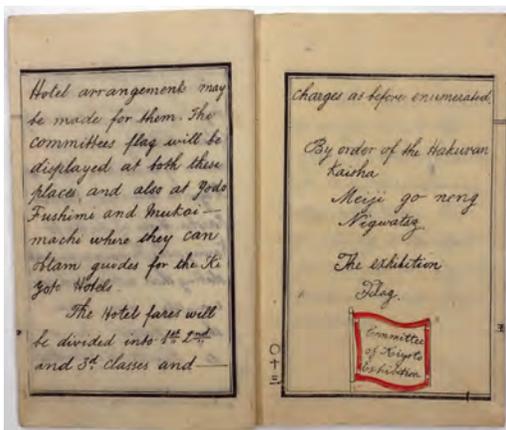
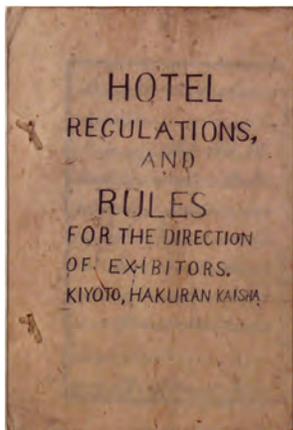
満院の芸香細帙(うんこうしょうちつ)鮮やかにして 等身の古典 新編に雑じる
 這(こ)の中 別して育英の物有り
 細読数行の単語篇
 集書院
 三溪居士

天地(あめつち)にみつる ほかけの
 くらかね はしも はれわたりけり
 九十一編
 式部

65 開化節用集 宇喜田小十郎輯 明治8年(1875)12月刊

(若林蒐書)

木版多色刷の口絵は勸業場図を先頭に、四条大橋、集書院、造幣寮・電信機・学校・郵便、蒸気船・鉄道・燈台・人力馬車が順に描かれ、歌人の高島式部(1785~1881)、漢学者の菊池三溪(1819~1891)が賛を寄せている。勸業場は京都府の殖産興業政策推進の拠点として明治4年2月に設立され、明石博高が勸業掛をつとめた。



70 博覧會江品物差出シ方 海外諸客入京投宿手續書 明治5年(1872)2月 京都博覧會社刊

(若林蒐書)

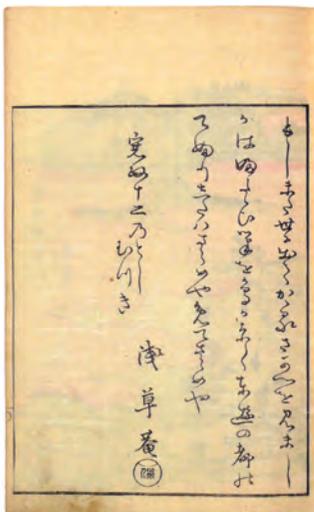
明治政府の全国的な呼びかけに応じて、京都では第1回博覧會が明治4年10月に西本願寺で、第2回が翌年(2月)10日から50日間の予定で、知恩院・建仁寺・西本願寺を会場として開催された。本書を発行した京都博覧會社は第1回博覧會終了後に、富裕層の出資者によって結成され、第2回博覧會に際して、明石博高ら京都府博覧會掛が参加して、半官半民の会社となった。産婦人科医・蔵書家佐伯理一郎(1862~1953)の旧蔵書。

神田佐野文庫には、今回展示した 3bis ドドネウス『草木誌』（1608）、4『ジャワ植物図譜』（辻蘭室筆蘭文及び和訳 宇田川榕菴筆彩色図 F. ノローニャ原画）、46『朋氏解体書』（ボンベ解剖学蘭文講義録、越前勝山藩医学士秦朴仙筆）の他に、特筆すべき貴重な洋学史資料として次の 5 点があります。そのうち、シーボルト自筆書簡と大黒屋光太夫自筆ロシア文字は、若林コレクション（若林菟書）から発見されたものです。

1 葛飾北斎画 『画本東都遊』 上中下 3 巻 寛政 12 年（1800）正月序 林忠正旧蔵



卷上 表紙



卷上 序文



林忠正蔵書印



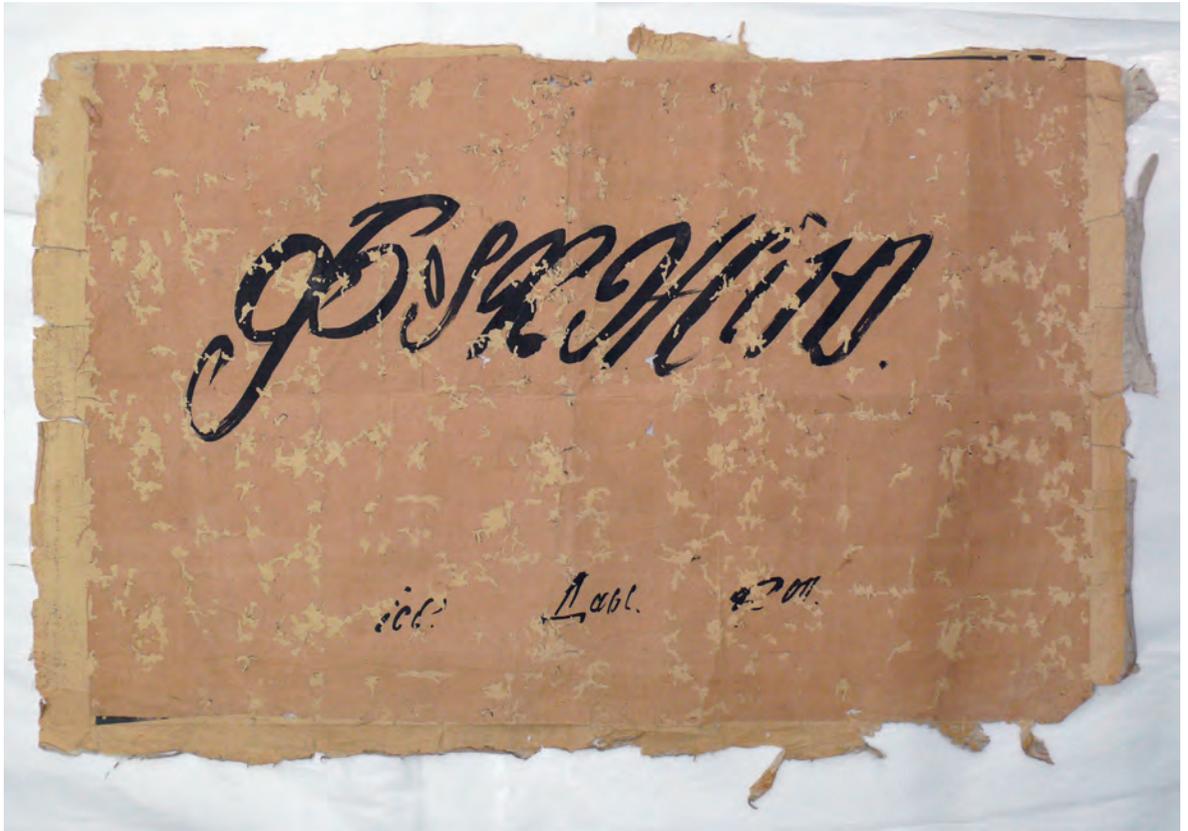
日本橋長崎屋図 巻中

長崎屋は江戸日本橋本石町 3 丁目にあった時の鐘の隣に位置し、享保年間から代々薬種商を営んでいた長崎屋源右衛門（本姓江原）の別宅であった。オランダ商館長一行が、毎年（寛政 2 年 1790 年からは 4 年に 1 回）陽暦 3 月または 4 月に 3 週間ほど滞在したこの定宿は、江戸名所のひとつであり、市井の庶民が好奇の眼差しを寄せていた。

葛飾北斎の長崎屋図は教科書や歴史書、図録類にしばしば掲載され、よく知られている。北斎の狂歌画本『画本東都遊（ゑほんあづまあそび）』（享和 2 年、蔦屋重三郎刊、上中下 3 巻 3 冊）に所載の木版多色刷りである。本書は明治 11 年（1878）

にパリ万国博覧会の通訳として渡仏し、パリで美術商として活躍した林忠正（1853-1906）の旧蔵本（大判、264×175mm）である。

本書のように「寛政十二のとしむつき」の浅草庵（伊勢屋久右衛門）序文を有する『画本東都遊』色摺本は現存希少である。おそらく寛政 12 年正月刊行の『東都名所一覽』の続篇として、まもなく刊行されたと推定される。長崎屋はこの版によって名実ともに、江戸名所の仲間入りを果たしたといっただらう。



縦 31cm、横 47cmの和紙に墨と筆で、「ФУКЖЮ」(フクジュ)と大書し、「i СЕ. Даы. Коо.」(イセ ダイコー)と署名する。それぞれ、「福寿」「伊勢 大光」を意味する。

伊勢の港町白子(しろこ)の船頭大黒屋光太夫(1751～1828)は1783年1月15日に遭難し、ロシアに漂流。ロシアの女帝エカテリーナ2世の許可を得て、1792年10月9日、使節アダムス・ラクスマンに送られて、10年ぶりに、部下の小市(こいち)、磯吉とともに根室に帰国した。翌年、小市は根室で病死したが、光太夫と磯吉は江戸に移送され、幕府の対ロシア政策に必要な貴重なロシア情報をもたらした。1793年10月、二人は將軍家斉(いえなり)の上覧を受けて時の人となり、將軍侍医で蘭学者桂川甫周は光太夫からロシア事情を聞き取り、翌年、日本最初の本格的なロシア研究書、『北極聞略(ほくさぶんりやく)』を著した。

光太夫のロシア体験談とロシア文字は支配層や知識人だけでなく、庶民の耳目も集めた。持ち帰ったロシアの文物、衣服、生活用具は鎖国下の庶民の好奇心を刺激し、当時各地で流行した見せ物に出品され、引っ張りだことなった。とくに光太夫自筆のロシア文字は珍しがられ、光太夫は方々から求められてロシア文字の書を揮毫(きごう)した。寛政7年(1795)8月、名古屋大須の寺で開催された漂民小市の遺品展には、ロシア文字で「今啼(ない)た声はたしかに時鳥(ほととぎす)」と墨書した掛物が出品された。享和2年(1802)、光太夫は許されて故郷の白子に帰った。この年、京都の蘭学者辻蘭室は光太夫の書いたロシア文字のアルファベットを入手し、言語学的な分析を加えている。

光太夫自筆のロシア文字墨書は所在不明となったものも含めて、現在までに40点ほど知られている。光太夫の出身地、三重県鈴鹿市若松町にある大黒屋光太夫記念館には、そのう

ち20点が収集されている。イロハ文字(13例)、ツル(6例)について多いのが「フクジュ」である。「フクジュ」はこれまで4点知られており(うち1点は所在不明)、若林コレクションの「フクジュ」は5例目となる。過去4点の「フクジュ」の墨書のうち最も古い日付は、「文化九年申歳五月吉日 大光書 六十武翁」とあるもので、同じ日付のものが別に1枚、67歳のものが1枚、日付も歳もないものが1枚ある(*)。

ツル(6例)、カメ(2例)、マツ(1例)は長寿を象徴するめでたい文字であり、フクジュ(5例)も同様であるが、そのロシア文字によるローマ字書きが庶民の趣味に合い、相当流行したと思われる。蘭学の普及とともにオランダ語のローマ字墨書が為政者や学者・知識人、富裕な好事家に好まれ、オランダ通詞が彼らの求めに応じて、オランダ人の手をまねて内職とした現象と比べると、漂民光太夫のロシア文字はより庶民的であり、光太夫は庶民のスター的存在として、一時的ではあれ、ロシアに対する庶民的な異国趣味を巻き起こしたと言える。

また、ツル、カメ、フクジュは文化年間(1804～1818)に巻き起こった園芸ブームと無縁ではない。光太夫がこれらのめでたい言葉をロシア文字で書いたのは当時の福寿草ブームを反映していると思われる。福寿草の鉢植えが流行し、染め付けの鉢にはツルやカメや七福神が画かれていた。晩年の光太夫は「フクジュ」とロシア文字を墨書するたびに、ロシアの厳しい冬に耐えて生き長らえ、帰国できた喜びを福寿草に見だしていたのではないだろうか。この書は大変力強い筆致で、彼の意志の強さも感じ取ることができる。

(*) 光太夫自筆ロシア文字墨書の伝存状況は代田美里氏(大黒屋光太夫記念館)のご教示による。

3 1815年ナポレオン戦役銅版図・記念メダル

解説小冊子『1815年戦役要録』(Merkwaardigste oorlogsgebeurtenissen van het Jaar 1815. n.p. n.d. [c. 1816]) 共 書物型ケース入



書物型ケースに銅版図・記念メダル・解説小冊子のセットを収納する。ケースの表紙絵は田園を敗走するフランス軍部隊(表)と、下半身鼠姿の哀れなナポレオンが同盟軍兵士に取り囲まれ、銃剣で突かれる情景(裏)を描く。

解説小冊子は文政9年(1826)7月に、幕府天文方高橋景保が蘭学者青地林宗に翻訳させた日本最初のナポレオン伝『別勒阿利安設(ベレリアンセ)戦記』(国際日本文化研究センター所蔵青地林宗自筆本)の典拠である。「ベレリアンセ」は戦場ワートルローにあったフランス語の農場名「ラ・ベル・アリアンス」(La Belle Alliance、麗しき同盟の意)をさす。1815

年6月18日、ナポレオン軍を破った英蘭連合とプロイセンの同盟軍は、のちワートルローの戦いを好んで「ベル・アリアンスの戦い」と呼んだ。

銅版画は直径4.4cmの小円形7枚からなり、朱色のリボンで連結されている。各枚両面印刷で手彩色。蛇腹式に重ねて、錫製のネジ蓋式メダル(メダillonと呼ばれる)に収める方式である。表と裏、計14場面は1~14の番号が付けられ、小冊子(全14章)の各章に対応する。原文の章題の現代語訳は以下の通りである。

(章題の現代語訳)

- 1 ウィーン会議
- 2 ボナパルトのエルバ島脱出とフランス上陸
- 3 オッキオベッコ橋頭堡の攻撃
- 4 オーストリア皇帝軍のナポリ入城
- 5 ブリュッヘル、ウェリントン指揮下のベル・アリアンス戦
- 6 フランス軍の退却
- 7 ヴレーデ侯、ザールゲミュント、ザールブリュケンを攻撃
- 8 ロシア軍、シャロンを攻撃
- 9 同盟軍のバリ入城
- 10 ボナパルト、イギリス軍に降伏
- 11 オーストリア軍によるユナング包囲戦
- 12 セント・ヘレナ島
- 13 和蘭皇太子、ベル・アリアンスの戦いにおいて、レ・カトル・ブラ陣地を英雄的に防衛
- 14 ベル・アリアンス農場



書物型ケースの表紙絵



作者将軍家侍医桂川甫賢が画面下の余白にペン書きしたオランダ語署名文(下記の翻刻参照)によれば、この宴会は文政5年2月27日に長崎屋で開催された。西暦1822年4月18日にあたる。描かれた10人にはオランダ語名またはオランダ語の説明が付けられている。それによって人物を特定し、年齢を示そう。

洋装の3人のうち、左から、Abrahamはオランダ通詞から幕府天文台に抜擢された蘭学者馬場佐十郎(貞由)、36歳。出島のオランダ人からそう呼ばれていた。文化5年(1808)4月頃から天文方手代として高橋作左衛門景保のもとで翻訳に従事していたが、激務と酒癖のため、この年死去している。Botanicusは筆者の甫賢、26歳。本草学に通じていたことから商館長ドーフがWilhelmus Botanicusの蘭名を与えた。Van der Stolpはオランダ語に通じた中津藩主奥平昌高(1781-1855)の側近神谷弘孝(ひろよし、源内)である。神谷は昌高の企画により、馬場佐十郎の協力のもとに、我が国最初の日蘭辞典『蘭語訳撰』(1810)を編集刊行した。

黒紋付の羽織に袴をはき、頭巾をかぶったオランダ人De Heer Opperhoofd(商館長殿)は、コック・ブロムホフ、43歳。手前に背を向け、薄茶色の肩衣と青色の袴からなる継袴を着て、短髪の若いオランダ人De Heer Fisscher(フィッセル氏)は芝居好きの一等書記ファン・オーフルメル・フィッセル、22歳。商館長一行は旧暦2月5日(3月27日)に江戸に到着し、2月15日(4月6日)に将軍拝礼を終え、その後長崎屋で蘭学者の桂川甫賢、大槻玄沢、宇田川玄真、高橋作左衛門らと交流。2月30日(4月21日)の江戸出発を前にした仮装宴会を楽しんでいる。フィッセルは、日本人3人の洋装は甫賢が家に伝わった帽子、衣服、靴などを持ち込んだが、流行の時代が異なり奇妙だ、と回想記に記している。

10人の配置は江戸時代の宴会形式である円座を思わせる。洋装と和装を離れた仮装宴会として眺めると、和装のブロムホフとフィッセルがホスト役、椅子を使っている洋装の馬場、甫賢、神谷が招客、畳にじかに座っている4人の日本人が宴

会の実際の主催者側と見立てることができる。

画面中央の朱塗りの台の手前で、商館長コック・ブロムホフとフィッセルに向かって、まさに給仕しようとしている若い女性Zuster van Genzabro(ゲンザブロウの妹)とその兄は素性が分からない。その背後のGenijmon(ゲンエモン)は長崎屋の主人江原源右衛門、推定47歳。主人の斜め後ろの女性Vrouw van Genzabro(ゲンザブロウの妻)と画面右下の男性Kaseya Tamesito(カセヤ・タメシト、カサヤ・タメヒトか)も分からない。

画面手前中央に座る日本人Albrand(アルブランド)はこのとき商館長一行に随行して江戸に来た小通詞並茂土伎次郎(しげ・ときじろう、生没年不明)であろう。土伎次郎は商館長ドーフの蘭辞典編纂に協力した有能な通詞であり、コック・ブロムホフから英語を習った通詞の一人である。

画面下の蘭文は以下の通り。

Den 27^{ste} van Niguats op malkander plaisieren in Hospes Genijmonnsche huis in Jedo. A^o 1822.

Afgetekend door

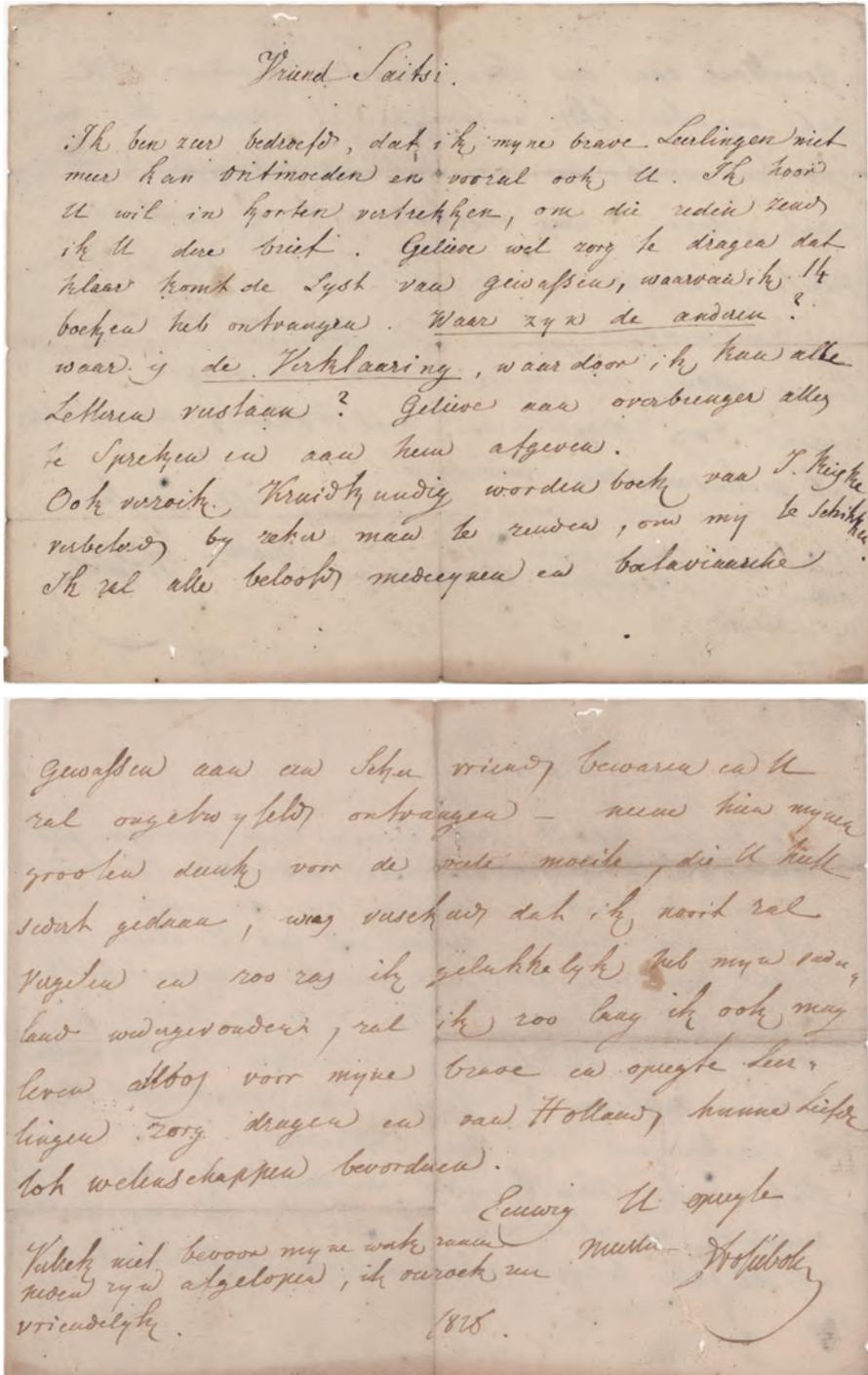
W: Botanicus of Caneele Rivier junior.

(朱文長方印: 国寧)

(2月27日江戸の旅館主人源右衛門宅における交遊の際1822年W. ボタニクスまたは桂川ユニオル画)

オランダ語Hospesは宿屋主人の意。「A^o」はAnno Domini(主イエス・キリスト生誕以来)の年号をあらわす略号であるが、オランダ通詞や蘭学者たちはそのような宗教的背景は無視して、オランダ語の文章で普通に使用していた。

本図は1907年にアムステルダムで競売に掛けられた商館長ブロムホフ遺品のひとつであることが、当時のフランス語競売目録と本図との比較分析から、判明した。甫賢が宴会後にブロムホフに贈り、ブロムホフが生涯、愛蔵していたことは間違いないだろう。2019年にオランダの古書店で見つかり、112年ぶりに日本に帰郷した。



出島医師シーボルト (1796～1866) は門人伊藤圭介 (1803～1901、名古屋生まれ) がもたらした 1600 種以上の植物標本をもとに、圭介とその兄弟子賀来佐之 (かく・すけゆき、佐一郎、1799～1857、豊後高田生まれ) の協力を得て、文政 10 年 (1827) 9 月 9 日から 1 年余りの間、出島で「日本植物目録」の完成をめざした。

ところが、圭介は半年あまり長崎に滞在したあと、名古屋へ帰ってしまった。そこで、シーボルトはもっぱらサイチこと佐之を頼りにした。1828 年 6 月 18 日までに学名と和名の欄はほぼ完成したようである。その後、漢名を付ける作業の途中でサイチが突然、帰国すると言い出したため、シーボル

トは急いでこの督促状を書き送った。シーボルト事件の発端となるコルネリス・ハウトマン号の座礁 (1828 年 9 月 17 日) 以前に書かれたものであろう。シーボルトの日本植物研究の実態と賀来佐之の知られざる貢献を伝える貴重な史料である。

この書簡は賀来佐之が家蔵のシーボルト編「日本植物目録」の写本を他人に貸して失ったため、圭介が天保 2 年 (1831) 5 月 11 日付けで佐之に贈呈した写本 Naamlijst van Japansche gewassen (日本植物目録、若林コレクション 33325) に挿入されていたもので、本学日本研究所の町田明広副所長が、2014 年 12 月に同コレクションを整理中に発見された。

書簡原文の翻刻と和訳は以下の通りである。

(翻刻)

Vriend Saitsi

Ik ben zeer bedroefd, dat ik myne brave Leerlingen niet meer kan ontmoeden[sic] en vooral ook U. Ik hoor U wil in korten vertrekken, om die reden zend ik U deze brief. Gelieve wel zorg te dragen dat klaar komt de Lyst van gewassen, waarvan ik 14 boeken heb ontvangen. Waar zyn de anderen? waar is de Verklaaring, waardoor ik kan alle Letteren verstaan? Gelieve aan overbrenger alles te spreken en aan hem afgeven.

Ook verzoek Kruidkundig worden [sic:woorden] boek van I. Keiske verbeterd by zeker man te zenden, om my te schicken. Ik zal alle beloofd medecynen[sic:medicynen] en bataviaasche Gewassen aan een Saker vriend bewaren en U zal ongetwyfeld ontvangen — neem hier mynen grooten dank voor de veele moeite, die U heeft sedert gedaan, wees versekert dat ik nooit zal vergeten en zoo ras ik gelukkelyk heb myn vaderland wedergevonden, zal ik zoo lang ik ook mag leven altoos voor myne brave en opregte leerlingen zorg dragen en van Holland hunne Liefde tot wetenschappen bevorderen.

Eeuwig U opregte
meester Von Siebold

Vertrek niet bevoor[sic:bevorens] myne werkzaam heden zyn afgelopen, ik verzoek zeer vriendelyk.

1828.

(和訳)

友人サイチ(賀来佐之)へ

立派な教え子たち、とりわけ貴殿にももう会えなくなるのは悲しい限りです。貴殿がまもなく出発すると聞きましたので、この手紙を送ります。植物目録はノート14冊分を受け取りましたが、どうか努めて目録を完成させるようにして下さい。他のノートはどこにあるのでしょうか。私がすべての文字(漢字・仮名)を理解できるようにした解説はどこにありますか。遣いの者に委細を話して、彼に渡して下さい。

また、イ・ケイスケ(伊藤圭介)の植物学辞彙の改訂稿を私の手に渡すよう、確かな人に送って下さい。約束した薬とバタヴィアの植物は誰か友人に託しますので、貴殿は間違いなく受け取れるはずです。

—これまで大変お世話になり、誠にありがたく感謝致します。(貴殿のことは)決して忘れませんのでご安心下さい。幸いにも祖国を再び見ることができたら、すぐに、そして命のある限り、立派で忠実な教え子たちのことを思い、オランダの地から、学問に対する彼らの情熱を促進するようにします。

永遠に貴殿の誠実なる師

フォン・シーボルト

深い友情からのお願いです。私の仕事を終える前に出発しないように。

1828年

出品資料 追補:

3bis ココヤシ図 ドネウス『草木誌』(1608) pp.1500-1501 (神田佐野文庫)

小野蘭山はドドネウス『草木誌』(アントワープ、1644)の付録「異国産植物誌」(全52章)第25章のココヤシ図を参照して、「漂流木実」を「海ヤシ等ノ一種」と鑑定した。付録「異国産植物誌」は本書『草木誌』1608年ライデン版に初めて付けられた。本図は1618年ライデン版にも掲載された。インド洋モルディブ産のココヤシはIndiaansche Note-boom(インディアンセ・ノテ・ボーム、インドクルミの意)のオランダ語名で知られた。



若林コレクションの里帰り — 神田佐野文庫貴重資料 —

発行日 2022年4月16日

発行 神田外語大学附属図書館

〒261-0014 千葉県千葉市美浜区若葉1-4-1 神田外語大学7号館1階

TEL: 043-273-1192 FAX: 043-275-2783

E-mail: tosho-kyoryoku@kanda.kuis.ac.jp

制作 株式会社 トーヨー企画

〒602-0923 京都市上京区油小路通中立売上ル油橋詰町93-7

Tel. 075-411-8288

© Kanda University Library

Printed in Japan

*許可なく転載、複写、複製することを禁じます。

*本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者などの第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用であっても著作権上認められていません。